水彩画を楽しみ、いつの間にか20年

《日立理科クラブとの２足の草鞋で生き甲斐も倍増》

鈴置　昭

６０年ぶりの再会

昨年、母が９７歳で他界した。しばらく空き家になっていた実家を整理してくれた妹から、遺品の中にこんなものがあったと一枚の絵が送られてきた。私が中学２年の夏休みに制作した貼り絵で、イギリスの詩人バイロンの肖像画の模写である。しばらく中学校の職員室あたりに飾られていたものを妹が持ち帰ったものという。私にとっては６０年ぶりの再会であり、制作時の記憶がよみがえった。教科書に載っていたモノクロのポートレートを参考にして、母親からもらった様々な色柄の端切れを切り刻んで、画用紙に貼り付けた。これが手元に残る子供の頃の唯一の作品となった。

中学２年の作品

ゴッホとの出会い

昭和３３年、浜松北高校１年の秋ことである。私は東京国立博物館前の「ゴッホ展」の開館を待つ長い行列の中にいた。美術部顧問の先生の引率のもと、１０名ほどの部員が前夜の浜松駅から夜行列車に乗り込み、ほとんど一睡もできぬままに上野の美術館に着いた。

展示はオランダのクレーラー・ミューラー美術館の所蔵作品を中心とした１３０点。有名な「自画像」や「アルルのはね橋」、「夜のカフェー」などが印象に残った。ゴッホとの初めての出会いであり、“絵といえば印象派”が刷り込まれた瞬間だった。その後、出張で立ち寄ったアムステルダムのゴッホ美術館をでは、「種まく人」や「ひまわり」などを見た。また、フランス旅行ではゴッホゆかりのアルルの街を散策し、心を病んで入院した病院、夜のカフェーの店、はね橋などを訪れた。

５６歳で教室入門

有難いことに５５歳になると、日立では定年に備えたセミナーを実施してくれた。中でも最も印象に残ったのは「定年になってから趣味を探すのは手遅れだよ」という言葉だった。昔取った杵柄で、絵でもやってみようかと自己流で淡彩スケッチを描き始めたが、明らかに進歩がない。そこで、５６歳のときに日立市宮田町のアトリエ・ド・エリスに入門し、津軽石先生の指導を受けるようになった。当初の計画では、現役の間は手軽に取り組める水彩画を、リタイアしたら油絵に転向するつもりだった。しかし、いったん水彩画を始めてみるとなかなか奥が深く、途中でやめられず、いまだに水彩画を描いている。

画業２０年

このところ毎年１０回ほどの展覧会に出展しているが、公募展への出展は主に日立市展、茨城県展、水彩連盟展の三つである。グループ展の作品は気軽に制作できるが、公募展では入落選や受賞が伴うので、入念な準備が必要となる。小下絵、中下絵、本番の三工程をかけることが多く、そのため、自分の作品が受賞したときの喜びはまた格別である。幸いなことに、これまで、後に示す５つの公募展で１４の賞を頂くことができた。中でも、後期高齢者となった平成２９年は私の画歴の中でも特記すべき年となった。

４月の水彩連盟展（六本木国立新美術館）に出展した「みずかげ」が会員特別賞（損保ジャパン日本興亜美術財団賞）に選ばれたのだ。この作品はフランスの片田舎、かつてモネが住んでいたジヴェルニーの風景で、川の流れの先にモネの睡蓮の池があると想像しながら描いた。東京の展覧会は多くの友人、知人にご高覧頂き、それに続いて名古屋、大阪の巡回展にも出展した。名古屋では毎年、高校の同級生に見てもらっており、この年は本人も出かけて行って旧交を温めた。

名古屋巡回展で同級生と
（筆者は右から二人目）

さらに、９月の茨城県美術展（水戸県民文化センター）に出展した「秋景」も会員賞（茨城新聞社賞）一席に選ばれた。かつて住んでいた日立市小咲台団地の奥の風景である。この一帯は冬枯れの佇まいが素敵で、散歩がてらによく取材したものである。

茨城県美術展会員賞
「秋景」

個展もこれまで日立シビックセンターギャラリーにおいて３回開催した。会場が広いため、４０～５０点の作品が必要であり、５年に一度くらいのペースでしか開催できない。毎回多数の来場者があり、励ましの言葉をかけて頂いている。また、私の絵を見て水彩画を始められたという方にもお会いした。嬉しい限りである。２０年間も絵を続けてこられたのは、まずは家族の理解と支援があったことが第一だろう。友人、知人からも温かい心遣いを頂いた。また、折々に戴いた公募展の受賞も大きな励みとなった。

主な受賞歴

水彩連盟展：会員特別賞他３件
茨城県美術展：会員賞他４件
日立市展：市長賞他１件
国文祭展：茨城県近代美術館賞
黄門の里絵画展：奨励賞２件

二足の草鞋

６３歳でリタイアした頃、（日）原子力の仲間とエネルギーや環境問題を考える「ひまわり」の活動を始めた。その後、これが下敷きとなり「日立理科クラブ」が発足し、私は「理数アカデミー・理科クラス」を担当している。２５名ほどの仲間と一緒に科学者や技術者の卵を育てる活動だ。毎年、３０～４０名の小中学生が応募してくれる。昨年から、東京大学との連携で「ジュニアドクター育成塾」も併設し、授業の質的向上にも取り組んでいる。

水彩画と理科教育では使うスキルも付き合う仲間も全く異なるが、この二足の草鞋が生き甲斐を倍増させてくれていることは確かである。

鈴置　昭氏　連絡先
〒312-0052 ひたちなか市東石川 1286
メール：suzuokiaki06113@yahoo.co.jp